

本人活動における支援の必要性に関する研究

ー参加型アクションリサーチの実施を通してー

○ 筑波大学 森地徹 (05673)

[キーワード] 本人活動、知的障害者、参加型アクションリサーチ

1. 研究目的

セルフアドボカシーという知的障害当事者による知的障害当事者のための権利擁護活動について、日本では本人活動と呼ばれて展開されてきている。本人活動はその性格から知的障害当事者によって運営されるべきものだと言えるが、知的障害当事者の障害特性に起因する支援ニーズへの対応も必要になる。そのため、本人活動の展開において知的障害当事者を支援する支援者の存在が必要となるが、現状として知的障害当事者の視点から本人活動の支援についてどのようなことが必要とされ、どのようなことが必要とされていないのか明らかにされていない。そこで、本研究では本人活動における支援について知的障害当事者の視点からどのようなことが必要とされ、どのようなことが必要とされていないのかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

知的障害当事者の参加による参加型アクションリサーチの実施を通して、本人活動の展開において必要とされる支援と必要とされない支援について明らかにすることとした。この参加型アクションリサーチとは、一連の調査プロセスに当事者が関わり、当事者の知見が活かされた調査が行われることを通して調査に関わる当事者がエンパワメントされていくという調査手法であり、社会福祉のみならず様々な研究領域において展開されてきている。

本研究において参加型アクションリサーチを用いたのは、本人活動における全国的なリーダーである知的障害当事者2名から本研究課題に関する調査を実施したい旨についての希望があがったためであり、研究の実施に際しては調査項目の設定から調査の実施までこの知的障害当事者2名が中心的な役割を果たすこととなった。また、調査の実施に際してはこの知的障害当事者2名が有する本人活動に関するネットワークを基に、北海道から九州までの全国8地域を対象に地域ごとに1か所以上の本人活動団体のメンバーに対して調査を実施することとした。

その際の調査項目は、調査者である知的障害当事者2名の意見をもとに、①本人活動において支援者がいて良かったことは何か、②本人活動において支援者がいて嫌だったことは何か、の2項目とした。そして、これらの調査項目を用いて前述の2名の知的障害当事者である調査者による半構造化面接を実施した。その際、調査に要する時間は対象者の負担を考え1名概ね15分とした。また、調査の実施に際しては書面及び口頭で対象者に確認

の上、ICレコーダーで調査内容を録音することとした。その上で、分析に際しては録音内容を基に逐語録を作成した上で、質的データ分析ソフトであるMAXQDA2018を用いて質的分析を行った。

3. 倫理的配慮

調査の実施に際して、調査対象者である知的障害当事者に調査の目的と内容をわかりやすく説明し、あわせて調査への協力は自由意思に基づくものであること、調査における匿名性が担保されていること、調査内容を録音すること、をわかりやすく説明した上で、同意が得られる場合にのみ同意書を取り交わして調査を実施した。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た上で実施した。

4. 研究結果

北海道から九州までの本人活動団体のメンバー77名（北海道5名、東北22名、関東25名、中部7名、近畿6名、中国7名、四国5名、九州6名）から回答を得た。その結果、本人活動において支援者がいて良かったこととして、支援者が手助けをしてくれる、支援者からアドバイスがもらえる、支援者に相談できる、支援者が話を聞いてくれる、支援者がいると安心できる、支援者といると勉強になる、支援者が優しく接してくれる、支援者とコミュニケーションが取れる、支援者が細かいことに口を出さない、支援者が重い障害にも対応できる、という声が挙げられた。

一方、本人活動において支援者がいて嫌だったこととして、支援者が出しゃばる、支援者から注意される、支援者と自分の意見が合わない、支援者の情報伝達が悪い、支援者からの注文が多い、支援者が手助けしすぎる、支援者からできると思われている、支援者が手助けをしてくれない、支援者が勝手に行動する、支援者がすぐに動いてくれない、支援者が命令をする、支援者がお金を使いすぎる、という声が挙げられた。

5. 考察

知的障害当事者の参加による参加型アクションリサーチの実施を通して、本人活動の展開において必要とされる支援と必要とされない支援について、本人活動団体のメンバーである知的障害当事者の声を通して明らかにすることができた。そしてその中で、支援者は本人活動団体のメンバーである知的障害当事者の手助けをしたりアドバイスをしたり相談に乗ったり話を聞いたりという知的障害当事者が本来求めている支援を行なっている反面、それらが行きすぎると出しゃばると感じられるなど望ましくない支援に繋がることが考えられた。また、支援者が手助けをしすぎたり、逆に手助けをしてくれなかったりと、本人活動団体のメンバーである知的障害当事者にとって必要とされる支援の内容と量が支援者にとって明らかになっていないことが考えられた。